

2015 年度活動報告 交換授業：インテンシブ 4A（文法・読解）

蔭山 拓（関西学院大学日本語教育センター）

内藤 真理子（関西学院大学日本語教育センター）

1. クラス概要

中級後半の学習者対象で、週3コマのクラス（同レベル2クラス並行）である。クラスの目標は、①中級後半レベルの語彙・表現を用いた文章が理解できるようになる、②テーマに関連する日本文化、事情に関する理解を深める、そして、③中級後半レベルの語彙・表現を使って自分の考えを話したり書いたりできるようになる、の3点である。使用教材は、『中級を学ぼう—中級中期』（スリーエーネットワーク）およびそれを基に担当者らが作成した補助教材（内容理解の確認シート、ディスカッション・トピック・シート、学習項目（文型）練習シート、復習クイズ等）である。

2. 授業内容

各課、本文を基に、大きく以下の①～⑪の学習活動を一つのユニットとする。①本文の言葉と内容の理解、②本文へのコメント書き込み（宿題）、③本文の内容確認、④音読練習、⑤コメントの交換とその過程で生じる様々な疑問・感想・意見等に関する話し合い（ピアワーク）、⑥本文テーマに関連する所定のトピックについてのディスカッション（ピアワーク）、⑦本文およびディスカッションを踏まえたレポートの作成（宿題）、⑧文法表現の用法練習、⑨本文の復習クイズ、⑩コメントシートおよびレポートのフィードバック、⑪添削後のレポートの読み聞かせ合い（ピアワーク）。そして、以上の一連の学習活動を通して、当該テーマに関する書記ならびに口頭言語の受容と産出両面の言語活動従事経験の積み重ねと、同活動従事に必要・有用な言語事項（語彙や表現など）の習得を図る¹。

今期の新たな取り組みとして、蔭山担当クラスでは、書記言語モードと口頭言語モードの連動の一層の強化と、言語活動従事の機会の拡充を図る試みとして、⑪を追加した。

3. 成果と今後の課題

上記⑪の活動は、授業中の学習者の反応からは、従来やや「書きっぱなし」の感があったレポートを自身のことばとして意識づける良い機会となったようである。この活動について期末アンケートでは特にコメントはなかったが、全体として概ね高評価であった。一方で、文法学習の比重拡大を希望する声も一部にあった。また、言語活動従事や内容中心の学習を重視する上では、学習の中心となる本文の見直しが今後の課題である。

¹ 教育の原理として、バフチン（1985-1975）の対話原理を基にした西口（2013）のSMTアプローチや、内容中心の教授法CBIなどの言語観・言語学習観を参考に考案。